
2009年 昴とひかり (2012年 愛と光へ 番外編)

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2009年 昴とひかり （2012年 愛と光へ 番外編）

【Nコード】

N0433K

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

2012年 愛と光への番外編です。

低い次元から戻り、さらに低い次元へと移行する前に、ちょっとしたハプニングがありました。今回はそのお話です。

1 10歳年下の昂くん

私の名前は、星野ひかり。29歳。バツ一で、今、実家で暮らしている。離婚の理由は、私が赤ちゃんを流産したこと。

夫だった徹郎はその後、浮気をしてその相手に子どもが出来、私に離婚をしてくれと言って来たのだ。

そして離婚してから、私は3ヶ月、自分の家に閉じこもった。

その後、友人の薫や、美里が私を外へと連れ出してくれて、徐々に社会復帰することが出来て、本屋でバイトをするまで、回復をした。

そのうえ、美里の影響で、若くてかつこいいイケメン俳優の、天宮昂くんのファンにもなった。まだ、天宮昂くんは、19歳。10歳も下の子のファンになってどうするよって自分でも呆れたが、彼のことを画面や、写真で見ていると、本当に心が癒されていくのだ。

映画も観に行った。舞台も観に行った。そのたびに大ファンになっていた。

そして…そうして…。

あれ…？何かがぼんやりしてるな。

最近、テレビでドラマが始まった。それを今日、見た。昂くんはあいかわらずかつこよかった。それにすごく奇麗だ。

役ではすごくクール。でも、最後には熱く語る、心のうちでは、熱いものを持っている。

本当の昴くんは、どうなんだろう？雑誌のインタビューや番宣では、自分はおつとおちゃらけてて、クールじゃないですよなんて言ってたけど。

でも、見た目大人っぽいし、落ち着いて見えるし…。

あれ…？そうだったけ？もっと、子どもっぽいところもあったんじゃないっけ？ああ。頭が痛い。

実は、昨日お風呂で転倒をした。思い切り、頭をぶつけた。一瞬目の前が真っ暗になり、それからしばらくして目を覚ました。すごい音がしたので、母が慌てて、風呂場に飛んできた。

「頭ぶつけた。でも、大丈夫だから…」

そう言っと、

「あなたは、前に階段も落っこちたんだから、気をつけなさいよ」と言われた。

「階段？」

聞き返したが、さっさと母は、バスルームを出て行ってしまった。

「階段ってどこの階段？うちかな？落ちたことあったっけ？」

思い出そうとすると、頭が痛くなる。

その日の夜、不思議な夢を見た。ドラマのセットの中で、昴くんが私に向かって、ドラマの台詞を言ってる夢だ。

あゝ、私、相当昴くんに入れ込んでるんだなゝ。

バイト先に行き、事務所で仕事を終えて、着替えをしてから少し店の方に行ってみた。私は本屋でバイトをしてるが、ある日事務所のほうで、事務の仕事をしてくれと頼まれ、それからはお店の方には出ていなかった。

ふらふらとお店の中を歩いていると、昴くんの写真が載ってる女性週刊誌が目飛び込んできた。

思わず、手にとって見ると、

「天宮昴、ドラマの恋人役、新條亜矢と夜中にデート。10歳上の彼女とは破局か？」と書いてあった。

えゝゝゝ？！10歳上の彼女？そんな人がいたの？今のドラマの共演してる、新條亜矢とデート？
ダ、ダブルでショック…。

立ち直れないくらいにショックを受け、私はふらふらと本屋を出た。
ま、待つて。芸能人なんだし、こんなにショックを受けてどうすんの、私。

それでも、よたよたと歩いてると、後ろから葉月ちゃんが走って、

「星野さん、一緒に帰りましょう」

と私を呼び止めた。

「あ、葉月ちゃん」

葉月ちゃんは本屋でアルバイトをしていて、私よりも10歳も下の、可愛いまじめな女の子だ。葉月ちゃんも昂くんのファンで、一緒に舞台も観に行った。

「さつき、お店の方に来てませんでしたか？」

「うん。ちよつとね…」

「あの週刊誌、見たんですか？でも、あんなのでたらめだから、気にすることないですよ。だいたい、中も見てもたけど、変な写真でした。わざと回りをぼやかしてて、多分、昂くんと新條亜矢だけでなく、他の人も一緒にご飯食べてたって感じてしたよ」

「え？」

私が昂くんと新條亜矢のことで、ふらふらになってたの、わかつちやったのかな……。あ、そっか。葉月ちゃん私がファンだってこと、知ってるもんね。

「ああいう週刊誌ってどうして、嘘を書くんでしょうね？前に写真が載っちゃったときだって、悟くんだってその場にいたのに」

「写真？悟くんって結城悟？」

「はい。そうです。一緒にいたのに、悟くんは載ってなかったじゃ

ないですか……。今回もきつとそうですよ」

「ふ、ふん」

何のことかわからなかったが、あまり深く追求はしなかった。

結城悟は、今24歳で、超うれっこ俳優だ。美里が大ファンで、結城悟が出る劇だから観にいこうと誘われ、その劇に昴くんも出て、私は一緒に行ったのだ。

あ那时的昴くん、本当にかっこよかった。それから、葉月ちゃんにもまた、観に行きましよう誘われ、観に行ったんだ。そのときには前から5列目の席で、すごく良く見えて……。

あ！思い出した！その舞台のあと、最後のほうまで残ってたなら、偶然にも悟くんと昴くんとばったり会って……。

会って……。どうしたっけな？うん。頭が痛い。いや、もっと前にも会って話をしたことがあるような……。

そうだ、美里。美里と行ったときも、昴くんと話をした。舞台の袖裏にいて、それを美里がみつけて……。

舞台観に来てくれて、ありがとうございますと、すごいさわやかな笑顔で言ってくれたんだ。

思い出したよ……。すごい可愛い笑顔で、でも綺麗で、それにカッコよくって。

わあ、なんで、今まで忘れてたんだろうか……。

でもまだ、何かぼやけてる。だけと思いだそうとすると、頭が痛くなる。

2 不思議なこと

家に帰り、何気にパソコンを開いた。そうだ。私、小説書いてたっけ。あれ、どうしたかな…。

わ。すごいアクセスの数。

あれ…？この感想、名前に天宮昴って書いてあるけど、本物？

「えええ？！」

私は慌てて、昴くんのブログも見た。そこには私の小説を紹介してある文が、書かれていた。

「え〜？！」

他にも何か書いてあるかと思い、読んでいたら、今大好きな人がいますって書いてあった。

「え…？」

すごいショックだ。あの10歳年上の彼女か…。それとも、新條亜矢？

「駄目だ。また、落ち込んだ」

ドスン…。ベッドに横になった。

いや、待てよ。私の小説を読んでくれてるんだよね。

それから、私の小説が映画化なんてされて、昴くんが演じてくれたりして。そうしたら私、また昴くんに会える！それどころか、近づくこともできる？…って、そんなの妄想だよな…。

はあ…。妄想でしかないことにまた落ち込んできて、私はさっさとお風呂にはいって、寝ることにした。

その日は寝ると夢の中で昴くんが現れて、私に、撮影中こんなことがあったとか、こんな内容のドラマで面白いんだって熱く語っていた。そんな昴くんが、すごく可愛いなって夢で私は思っていた。

翌日は、バイトのシフトが入っていない日だった。

「さて、今日は何をしようかな」

なんとなくパソコンを開けてみると、そこに新たな小説が書かれていた。

「ええ？私、こんなの書いてたっけ？」

題名は、「2012年 愛と光の地球」。うゝん、覚えがない。でも、私のパソコンだ。私以外の誰が書くんだろうか。

他にも、なんだか変なことが周りで起きていた。母が、その日の昼に私を呼び、

「ひかり！テレビに昴くん出てるわよ」

と言っただ。あれ？私がファンだって知ってたっけ？

ワイドショーをしていたのだが、そこで、新條亜矢とのが話題に出ていた。ドラマのシーンや、撮影風景まで映され、けっこう仲むづましい感じだった。

「あらゝゝ。こんな奇麗でスタイル抜群の若い子じゃ、あんた太刀打ちできないわね。かわいそうにね」

と母に言われてしまった。な、何それ…？別に、昴くんとうしようとか思っただいし。私は単なるファンだし…。と思いつつも、なぜか、胸が痛かった。

昴くんのアホ…。って思ってる私がいて、正直びっくりした。

美里からメールがあつた。

>あの記事、でたらめでしょ？

あの記事って、昴くんのことかなゝゝ。私はなんて返事していいかわからず、そのままほっておいてしまった。

そのあと、薫からもメールがあつた。

>だから、天宮昴なんてやめときなつて。あんな子と写真撮られちゃってるじゃん。

ええ？ファンだって、言っただけ私。でも、やめとけって言っこともないじゃない。単なるファンでいても、いいじゃない？

なんだか、変なメールばかりが来る。そのうえ、緒方さんからもメールが来て、

> ひかりさん、大丈夫ですか？

と書かれていた。うーん、何が？なんの心配をしてるんだろうか。確かに、相当ショックだったけど、でも相手は、芸能人だよ？そりゃ、なんだか知らないけど、心がすごく痛いし、何かぼっかりと穴が開いたような変な感覚はしてるけどさ…。

夕方、葉月ちゃんからメールが来て、

> ご飯食べに行きませんか？

と誘われた。葉月ちゃんは今日仕事だから、仕事終わってから会う約束をした。

新宿まで行き、本屋の入っているビルの前で待ち合わせをすると、

「今日はダブルデートしませんか？」

と葉月ちゃんが言ってきた。

「ダ、ダブル？」

誰と、誰が…？

「ついさっき、一緒にみんなでご飯食べようって言われて…。車で迎えにこれないらしいから、電車になるんですけど…」

「え？うん。それはいいけど、どこに行くの？」

「ちょっといい感じのお店を、発見したんです」

「そうなの？」

私は言われるがままに、ついていった。お店に着くまでの道のりで、葉月ちゃんは、昴くんのドラマ面白いですよねって、そんな話を楽しそうにしていた。

「そうだよ。面白いし、クールな昴くん、いいよね」

私も、嬉しくてつい、はしゃぎながら話し出した。

「だけど、撮影がものすごくハードみたいですね。今日だってギリギリまで、撮影みたいだし」

ギリギリ……？オンエアについてことかな？

「食事する時間も、そんなに取れないかもって言っていました」

「……？」

食事する時間もないほど、忙しいのかな？でも、それをなんで葉月ちゃんは知ってるのかな。

「何も言ってきてないんですか？」

「え？何が？」

「いえ、だったらいいんですけど」

「????」

なんのことかな。

店に着くと、そこはちよつと暗くて、そんなに人もいなかった。だけど、いい雰囲気のお店だった。

「奥の席にいますって」

いますって…、誰が？そういえば、ダブルデートって、何？葉月ちゃん、彼いたんだっけか？その人と、その友達？もしや、すごく若い子？

あれ…。美里とも、こんなことなかったっけ？ああ、そうだ。ビリヤード一緒にしたっけ。それで、私すごく気持ちが悪くなって、その時、誰かに助けられて…。誰？ぼやけてて、顔が思い出せない。それに頭が痛い。

「お待たせ！」

葉月ちゃんが明るく、誰かに言った。店内は暗く、そのうえ奥まった席だから、さらに暗くて顔が見えなかったが、

「ああ。いきなり呼んで、大丈夫だった？葉月」

と声が聞こえた。あれ？この声、聞き覚えがあるよ。そうそう、結城悟にそっくり。

テーブルの前まで来て、そこに座っている人を見ると、私は心臓が

飛び出そうなくらい、びつくりしてしまった。

え…？す、昴さんと、結城悟？！！！！

なんで？なんで二人がいるの？なんで、葉月ちゃん知ってるの？え？え？ダブルデートって？ええええ？！！！！

私が目を丸くしていると、

「どうしたの？」

と昴くんが聞いてきた。それでも、まだ私は口を開けばかんとしていた。昴くんは席を立て、私のそばに来て、私の肩に手をまわした。

「隣に座る？」

え？

「葉月ちゃんが、悟さんの隣に座りなよ」

今まで、昴くんが座ってた席に葉月ちゃんを座らせ、昴くんは私をその前の席に座るように言った。そして、昴くんは私の隣の席にいた。

「……？」

いったい、何がどうなって、こうなってるんだか…。

3 夢か現実か

これって、夢なのかな？ 所謂いえば、立て続けに昴くんの夢を見ていたし…。

「注文適当にしたんだ。あとは飲み物だけ。お酒とか、飲まないよね？」

「わ、私？ うん…」

昴くんにそう聞かれて、私はうなづいた。

「昴、水でいいよ。食後にコーヒーでも頼もうよ」

「悟さんも飲まないの？」

「うん。明日早いしさ。飲むと朝、起きるの辛い」

「明日も、ドラマの撮影？」

「うん。お前もだろ？ かなりハードだよな」

「そうなんだよね…。朝から、晩までスタジオに缶詰状態。そんで夜中にスタッフとかみんなで、焼肉食べにいったところを、写真撮られた」

「ああ、例の？ やっぱ、新條亜矢と二人っきりで、食へに行ったわけじゃなかったんだ。昴くん」

葉月ちゃんがそう聞くと、

「そりゃ、そうだよ。俺、あんまり、新條さんと親密でもないし」

と、昴くんが言った。

「ほーら。だから、大丈夫って言ったじゃないですか、星野さん」

葉月ちゃんが私に、そう言った。

「え？」

いきなりそんなことを言われて、私は戸惑った。それよりも、今の状況を説明して欲しかった。

「え？ひかり、もしかして、気にしてた？」

昴くんいきなり、呼び捨てにされた。

「…え？」

私は頭が真っ白になっていた。すぐ横に、あの綺麗でカッコいい昴くんがいて、その昴くんが私の名前を知っていて、そのうえ呼び捨てにしている。

「妬いてた？あはは…。それでもしかして、ずっと俺が話しかけても、無視してたの？っていうか、心閉ざしてなかった？」

「…へ？」

何？何言ってるの？

私は、しばらく放心状態になった。でも、もっと放心状態になるようなことを昴くんがしてきた。そつと私の手を握ったかと思うと、顔を近づけて耳元で、ささやいたのだ。

「ひかりって、ほんと可愛いよね…。でも、妬くようなことなんもないから安心して」

え？え？え〜〜〜？！私はあまりのことで、のけぞって、そのまま目が点になってたと思う。

「あれ？ひかり？」

昴くんは不思議そうな顔をして、こっちを見ていた。

「星野さん？」

「ひかりさん？」

葉月ちゃんと結城悟も、同時に私を見て、不思議そうな顔をした。

「どうしたの？」

昴くんが聞いてきた。

「え？」

「なんか変だよ。どうしたの？怒ってるのか？それとも…、何？」

「私？」

変なのはこの状況だ。何がいったいどうなってるのやら？

「……」

私はひきつりながら、昴くんのことを見ていた。そこにピザや、パスタや、サラダが運ばれてきた。

「と、とりあえず食べようか？」

結城悟がそう言った。

「うん…」

昴くんもうなづいた。私たちは、しばらくもくもくと食べていたが、そのうちに、葉月ちゃんが結城悟と話し出し、そこに昴くんも加わり、楽しそうに話していた。

私は、あまりにも変なことが起きてるので、食べてるものも味がわからないくらいだった。

あ、もしかして、やっぱりこれ、夢なんじゃないの？な〜んだ。リアルな夢だ。でも、味あんまりしないし…、とそんなことを私は思っていた。

お店を出ると、

「俺、朝早いし、このあとすぐに家に帰ろっかって思っただけど、ひかりどうする？」

昴くんが聞いてきた。

「え？私も帰るけど」

「自分ちに？それとも俺のマンション？」

「え？」

昴くんのマンション……？

「ああ、じゃ、ここから別行動な。葉月、俺んち泊まってく？」

「いいの？」

「いいよ」

「じゃ、そうする」

葉月ちゃんはそう言うと、私たちに手を振り、結城悟とさっさと歩いて駅の方へ行ってしまった。

と、泊まる？結城悟の家に？あ、あの二人っていったい…。ああ。そうだ、夢なんだ、夢…。

「ひかりも、泊まってけば？俺んち」

えええええ？！昴くんち？

「で、で、でも…」

「何そんなに焦ってんの？あれ？お母さんに怒られちゃうとか？」

「う、ううん。だ、大丈夫だと思うけど」

「じゃ、いいじゃん。泊まってけよ。だって、最近全然ひかりに会えてなかったし、俺、すんげえ会いたかったんだからさ」

え？！すごい都合のいい夢じゃない？この夢では昴くんはもしかして、私の恋人なんじゃ…。

電車に乗り、駅に着くと何分か歩いた。そしてあるマンションに昴くんは入っていった。

306号室の前に来て、昴くんはポケットからカギを出した。そして、私の背中に手を回して、

「どうぞ」

って中に、連れて入った。中に入ると、胸がきゅんってなるような、そんな匂いがした。あ、これ、昴くんの匂いなんだ。

ああ…。こんな夢は初めてだ。匂いまでする。

玄関を入り、もう一つドアを開けると、小さなテーブルとその横にベッドがあった。

昴くんはジャケットを脱いで、ハンガーにかけ、そのままキッチンに行ってしまった。

「なんか飲む？」

昴くんが聞いてきた。

「ううん」

私はその場で、どうしたらいいかもわからず、ぼろっとながら答えた。

「風呂わかすよ。入るでしょ？」

「え？」

風呂…？

「うん」

ああ…。すごい夢だ。

「一緒に入る？」

昴くんにそう聞かれ、思い切りうるたえた。

「え？い、一緒に？！！！！」

「え？駄目？なんで？前に一緒に入ったじゃん」

えええ？なんて、すごい夢を見てるんだ。私、欲求不満かな。

「あ…。いい。一人で入る」

夢なんだから、いいじゃないかと思いつつも、私は断った。

「ちえ〜」

昴くんはそう言うと、バスルームなのかな？あるドアを開けてそこに入っていった。

ちえ〜って…。この夢の昴くんはずいぶんと、幼い感じがする。

私はテーブルの前に、ちょこんと座った。昴くんが足早に部屋に来て、私の横に座ると、

「ひかり！！！」

と抱きついてきた。う〜〜わ〜〜〜！私は思い切り、かたまってしまった。

「あれ？照れてる？っていうか、さっきから心ずつと、閉じてるよね？」

心、閉じてるって何？

「声、聞こえないもん」

「声？」

「心の声」

「こ、心？」

昴くんは、この夢じゃ超能力者か？あ。そっか。ドラマの役になってるんだ。そんな夢なのね。夢だもんね、超能力があっても、不思議じゃないよね。

「どうやったら、心開けるかな？私」

とそう言う昴くんは、私の顔に顔を近づけてきて、唇にそっと触れた。

「え？」

キス？私はびっくりして、のけぞった。ああ。なんてすごい幸せな夢！ああ。のけぞったりして、もったいなかった。

なんてわけのわからないことを思っていると、また昴くんが私に近づき、そっとキスをしてきた。

私はもう、のけぞらなかった。昴くんの唇の感触も、私の頬にそっと触れた昴くんの手のあたたかさも、夢とは思えないくらいリアルに感じられた。ドキドキ！ものすごく心臓が早くなった。

昴くんは、一回顔を離して私の顔を見てから、また、キスをしてきた。今度は、すごく長く…。

やばい…。幸せすぎて、とけるかも…。

「とけちゃう？」

昴くんが聞いてきた。

「え？」

「くす…。俺もとけそうだったよ？」

昴くんが笑ってそう言った。

「え？私が思ったことなんで…？」

「なんでって…。心開いたからでしょ？もう、聞こえるよ？」

わ、私の心の声が？

『うん』

え？なんで体から、昴くんの声がするの？

『ひかり？』

『え？どうして…？』

『あれ？何、どうしたの？ひかり…。ひかりだよね？』

「……………」

私は頭が真っ白になったが、ああ、そうだった、夢だったと思い出した。

『夢？これが？』

『うん。すごい幸せな夢だ』

『夢じゃないよ。現実』

「嘘だ〜」

私は思わず笑った。

「え？なんで夢だって思うの？」

「だって、昴くんの家に来るわけないし、こんなキスまでして…」

「ひかり？ひかりだね？こっちの次元の…」

「次元？」

「あれ？なんで？どうしちゃったんだよ？俺のこと覚えてないの？」

「覚えてるよ。っていうか知ってるよ。もうずっと、私ファンだもの」

「フ、ファン？」

「そう」

「……」

昴くんのほうが、今度は目が点になっていた。

「ま、待って、ひかり。俺ら、付き合ってるよね？」

「え〜〜？あ、そっか。夢だもんね。すごい〜この夢」

「ちょ…、待って。あれ？どうしてこうなってるの？何が起きたんだよ？」

「え？」

「ひかり、最近なんかあった？」

「別に…？」

「ほんと？頭打ったとか」

「お風呂で転倒はしたけど」

「え？」

「思い切り、頭ぶつけたけど」

「それだ！！！」

「え？」

「記憶喪失だ！」

「誰が？」

「ひかりだよ」

「私が？」

「俺のこと忘れてるでしょ？」

「知ってるよ？」

「俺と付き合ってたこと、忘れてるでしょ？」

「付き合っ？まさか」

「やっぱり、忘れてる…。げええええ！すんげえショックだ。俺！」

「え？ええ？」

「どっから記憶ないの？」

「どっって、言われても…」

「俺んちに泊まりに来たことは？」

「ないよ」

「じゃ、次元を超えたこと」

「じ、次元…？ルパン3世の？」

「ちがうよ！その次元じゃなくて…」

「じゃ…、何？」

「……」

昴くんは、しばらくぽかんと口を開けてから、

「まさか、幽体離脱も、宇宙船も、ミッションも全部覚えてないとか？」

「え？何それ？」

「あ~~~~。全部覚えてないんだ。じゃ、俺の芝居観に来たのも」

「覚えてるよ」

「え？」

「2回行った。その時、話をしたよね？」

「それ、覚えてんの？じゃ、階段転げ落ちて……」

「誰が？」

「ひかりが」

「いつ？」

「5月だよ。駅の階段落ちたでしょ？」

「ううん」

「それも、忘れてるの?!」

「あ。そのことをお母さんが言ってたのか!」

『信じらんね〜。なんで、大事なところを忘れてるの?』

昂くんが心で叫んでいた。

「お、思い出せない?」

「うん。なんだか、ぼんやりとしてて、頭も痛くなるの」

「そっか…。わかった。じゃ、無理しないで。きっと、そのうちに思い出すよ」

「あのさあ…。一つ聞いてもいい?」

「何?」

「週刊誌に載ってた、10歳年上の彼女って…」

「ひかりのことに決まってるじゃん」

「わ、私?!」

「そっだよ」

ええ〜!!

4 昴くんが恋人？！

いきなり世界が変わってしまった。

遠い存在の芸能人で、手の届くわけない昴くんが、恋人？ちよつと近づけたらいいなとか、話せたらいいなとか、そんなこと思ってたのに、いきなり恋人…？

っていうか、マンションまで泊まったり、一緒にお風呂も入ってるの…？

『そうだよ。俺ら、めっちゃ仲が良くて』

昴くんの声がした。

ああ。それどころか、心で会話が出来ちゃうの？昴くん、ドラマだけじゃなく、本物も超能力者？

『違うつて。ひかりとだけだよ。心で会話できるのは』

「え？そうなの？なんで？」

「だって、俺ら同じ魂だから」

「え？」

「分かれて、地球に来たけど、もともとは一つだったんだ」

「……」

何それ？えつと…。本で読んだ。ツインソウル…。

「なんて呼ぶのかは知らないけどさ」

昴さんと私が、同じ魂？わくわく。すごいドラマチックとかロマンチックと言うか。じゃ、過去生でも恋人とかそういうのも…

「ないよ」

え？そうなの…？

「地球で会ったのは、今回の生が初めてだから」

そ、そうなんだ…。

「ひかりさ…。俺のファンってことは、俺のこと好きなんだよね？」

「え？うん…」

私はそう聞かれて、戸惑いながら返事をした。

「そっだよね。俺、嫌われてたりはしてないよね？」

「もちろん」

「そっか…」

『良かった』

昴くんのほつとした声がした。嫌うなんてとんでもない。昴くんと恋人だなんてもう、天にも昇るくらい嬉しい。

「え？そうなの？」

昴くんが少しにやけながら、聞いてきた。それから、

「ちょっとさ……。抱きしめてもいい？」

と聞いてくる。

「え？」

私は、ドキッとして、躊躇してしまうと、

「駄目？」

と少し甘えた目で見ながら、言ってくる。

「い、いいけど……」

ドキドキしながらそう言うと、昴くんは私のことをそっと抱きしめた。それから、ちょっとだけ腕に力を入れて、

『ひかりは、ひかりだもんね。どんなひかりも好きだよ……』

と、心でささやいた。それを聞いて、私は思い切り照れてしまった。

『あ、照れてる。可愛いな……。こういうところは、いつものひかりだ』

え？か、可愛い〜？もう、10歳も上なんだよ？私…。

『年齢なんて、関係ないって』

昴くんは心でそう言うと、

「キスもしていい？」

と聞いてきた。

してもいいかなんて聞かなくなつて、さっきしたじゃない…。

『あ、そっか』

昴くんは心でそう言うと、私にキスをしてきた。わ〜〜〜〜〜。
昴くんのキスはすごく優しく、本当に私はとろけそうになる。

『ひかりの反応、すごい新鮮』

『え？』

『なんでもない』

「じゃ、ひかり。一緒にお風呂も入る？」

「入らないよ〜」

「なんで？キスもOKだったのに」

「それとこれとは、別だよ！」

『ちえ〜〜』

ちえ〜〜つて…。

「じゃ、俺先に入っちゃうよ。そんで出たら寝ちゃうかもよ？」

「いいよ。明日早いんでしょ？」

「え？いいの？！」

「うん」

「本当に？あとで、先に寝て昴くんのばかばかかって言っても、俺知らないからね」

「……」

ばかばかかって…、なんじゃ、それ…。

昴くんはまた心の中で、ちえ〜〜つて言ってから、バスルームに向かっていた。

『あ〜あ。ひかりが泊まるって言っから、思い切りいちゃつける、抱き合えるって思ってたのにな』

部屋にいても、昴くんの心の声が聞こえてきた。思い切りいちゃつく？だ、抱き合える…？わ〜〜。そんなこと私、してたの？昴く

んと????

なんだか、テレビやドラマで見る昴くんと印象が違ってて、私は戸惑っていた。

『どんな印象だったの?』

わ。聞こえてるんだ。

『聞こえてるよ』

『えっと…。ドラマだとクールだし、大人っぽいから、年齢よりも大人で、しっかりしてるのかなって』

『それから?』

『そ、それから?えっと…。あ、舞台観終わって会ったとき、丁寧にお辞儀してくれて、すごくまじめで、礼儀正しいのになって…』

『ふうん…。でも、どんなふうに違ってたの?』

『それはその…』

意外と子供っぽくて、甘えん坊で、全然クールじゃないだなんて言えない。

『聞こえてるから』

『え?あ、そつか。丸聞こえか…』

『そついつこと』

『……』

『そう、何考えてても、俺にばれるから。隠しても無駄だよ』

『わ~~~~』

『恥ずかしがっても、無駄だよ。だから、恥ずかしがることなんてないよ』

昂くんは、少ししてお風呂からあがってきた。

「どうぞ。ひかり、入ってきていいよ。タオルは出しといたし、俺のパジャマも用意してるから、それ着て寝たらいいよ」

「うん。ありがとう」

昂くんは、片手に歯ブラシを持ち、頭にバスタオルを乗せたまま部屋に来てそう言った。

私はお風呂に入った。昂くんの匂いがして、ドキドキした。石鹸やシャンプーを見た。ああ、こういうの使ってるんだ。

さつき、濡れた髪、色っぱかったな…。それに、Ｔシャツから覗いてた鎖骨、めっちゃ綺麗だった。腕、意外と筋肉あるんだな…。

目の前で見ても、昂くんは綺麗な肌してる。羨ましいくらいだ。それに色白だ…。あ……。もう、どこをとっても、綺麗でかっこよくってセクシーで…。

『セ、セクシー？俺…』

わあ！聞かれてた。

『聞こえちゃうんだもん。しょうがないじゃん。で…、俺ってセクシーなの？』

『う、うん。見た目ね』

『見た目？』

『中身は、わからないけど』

『あ、そう…。中身はガキだって言いたいんだね？』

『そ、そうじゃないけど！』

『ふ〜んだ。いいけどさ』

あ、すねた…。なんだか、可愛い。すねてる昴くん、めっちゃ可愛い…。

『ひかり！』

『え？』

『ちよい、俺恥ずかしくなってきた』

『何が…？』

『だって、ひかり、さっきから俺のこと、褒めすぎ...』

『駄目？』

『駄目じゃないけど、その...』

『じゃ、考えないようにする』

『う...、うん』

そっか...。昂くん、照れてるんだ。

『照れてないって！』

『照れてるじゃない？』

『て。照れてるわけじゃ...、ないと思うけど...。いや、照れてるのかな？俺』

『うん』

『ああ。そっか。照れくさいのか...。うん』

昂くんはそう言うつと、

『わ~~~~っ照れてんのか、俺！』

て、心の中で叫んでいた。

お風呂から上がり部屋に行くと、昴くんはベッドの上で布団に抱きつきながら、すったもんだしていた。

「ど、どうしたの？」

「なんでもないよ…」

昴くんの髪が、まだぬれたままだ。

「ひかりだつて、ちゃんと乾かしてないじゃん。ドライヤーあったでしょ？」

「どこに？」

「ああ。そつか、場所わからないか」

昴くんはバスルームに行き、ドライヤーを持って部屋に戻ってきた。

「乾かしてあげるよ」

「え？」

嘘…。

「嘘じゃないよ」

「……」

『あれ？なんで恥ずかしがってるの？』

だだだ、だつて…。

「じゃあ、私も昴くんの髪、乾かしてもいいかな？」

「いいけど？」

「先に昴くんの髪、乾かすよ。ドライヤー貸して」

「え？うん」

私はドライヤーを受け取り、昴くんの髪を乾かし始めた。わくわく。昴くんのメイクやヘアをしている人、羨ましかったんだよね。昴くんの髪つて、サラサラなんだ…。

「え？メイクさんがうらやましかったの？」

あ…。また、聞かれてた。

「なんで？」

なんでつて、そりゃ、昴くんの髪や顔に触れることが出来て…。あ！これも聞かれてるんだ。今のはナシナシ！

「ぶふ…。もう遅いよ。聞こえちゃってるから」

あ……。なんでも筒抜けって困る！昴くんに笑われてるし！

「いいじゃん。隠すようなことでもないし」

隠すようなことですよ…。

くるって昂くんは、私の方を向いた。

「あ、ひかり真っ赤だ」

「え？」

私はさらに、戸惑ってしまった。

「あはは。可愛い」

えっ？もう、なんでこうも、10歳も下の子に可愛いとか言われてるの？あ、もしかしてからかわれてる？

「年齢は関係ないってば」

「そ、そうは言っても…」

「メイクさんのことも別に、羨ましがらなくてもいいのに」

「え？どうして？」

「だって、ひかりは髪や顔どころか、俺にいつもべったりくっついてるじゃんか」

私が~~~~~?????

「ほんと、全部忘れちゃってるんだね…」

ちよっと昂くんは、寂しそうにそう言った。

し、信じられない…。昨日まで画面の中にいる遠い存在だったんだよ？とても手に届くような存在じゃないって自分にも言ってたし。

それがいきなり、恋人ですとか、べったりくっついてるなんて言われても…。こんな目の前にいて、キスとかされたり、抱きつかれたりして…。

「……………」

昴くんは、きつと私の心の声を聞いただろうに、何も言わなかった。私も黙って、昴くんの顔を見ていた。

5 幽体離脱

すごい綺麗だ。こんなに間近で見れるなんて…。

「綺麗って言われてもな〜」

昂くんが、ちょっと鼻の横を掻いた。あ、照れてるのかな…。そんな表情は可愛い…。

「……」

昂くんにみとれてしまった。やばい。きっと私の目、うつとりしてる。

「あはは…。そうだね。ハート型してるよ」

「うそ！」

「あはは…」

昂くんが、目を細めて笑った。あ〜〜〜。やばすぎる。その笑顔、大好きなんだよね。

「……」

昂くんがしばらくうつむいた。思い切り照れてる…。昂くんが感じることが、伝わってきた。

「あのさ…」

「え？」

「いや、いいんだけど、そりゃ、嬉しいんだけど……」

「？」

「うん。みとれても、俺を見て喜んでくれても、いいんだけど……」

昂くんは、まだ下をむいたまま、頭を掻きながらそう言った。

「あ、でもやつぱり、照れくさいな……」

そう言つと、ぼりぼりつて頭を掻いて、髪をかきあげた。

「俺の髪はいいや。適当に乾くから。ひかりの髪、乾かすよ」

昂くんはドライヤーを持ち、私の髪を手ですくいながら、優しく乾かし始めてくれた。

う〜〜わ〜〜。たまに昂くんの指が、首や耳に当たる。胸が高鳴って、どくんどくんいつてる。

昂くんは私の髪が乾くとドライヤーを止めて、後ろから私のことを抱きしめてきた。

「す、昂くん?!」

抱きしめられて、思い切り戸惑っていると

『ひかり、愛してるよ』

と心の中で言ってきた。

うわ~~~~~!!!!!!愛してる?!!!!!!ど、どうしたらいいの?私!!!!!!

「どうしたらって…。ひかりは?」

「え?」

「俺のこと愛してる?」

え?え?え~~~~?そんなこといきなり聞かれても…。

「わ、私は…」

好きだけど、でも昨日まで私、昴くんのことファンでいたけど。

『ファン?』

だって、本当の昴くんのこと知らないし。

「本当の俺?」

こうやって目の前にいても、ときめいてる。昴くんに抱きしめられて、ドキドキしてる。けどどこかで、安心してゐる。あつたかくつて優しい昴くんのぬくもりに…。

体中が反応してる…。キスされたときみたいに、とけちゃいそうだ。

「なんだ…」

「え?!」

「やっぱり、俺のこと愛してくれてるんじゃない」

「え？」

「わかるよ。ひかりの感じてること伝わってくるから」

「……」

「うわー。とけちゃいそうになってるのも？」

「だから、俺も同じだよ」

「え？」

『ひかりといると、あつたかくって、気持ちよくって、嬉しくって……』

昂くんの心の声が聞こえた。

『あ、限界……』

げ、限界？

『抱いたりしたら、駄目かな?』

「ええ?!」

私は思い切り、驚いて慌ててしまった。

だ、だ、だ…、抱く…?

『駄目か…』

駄目かって言われても、ど、どうしたらいいの?

『ひかり、もういい加減、思い出して?俺らのこと』

『え…?そう言われても…』

思い出そうとしてみた。うすばんやりした何かが、頭の中にあるんだけど、いきなり頭痛がしてそれ以上は思い出せない。

「ごめん。無理しないで。そっか、思い出そうとすると、頭痛するの」

昴くんは優しくそう言ってくれた。

「ま、いいや。これも宇宙に任せてみよう。そのうち思い出すよね?」

「ごめんね」

「あやまることないって。なんか、うん。こういつのも、新鮮でいいし。あ。いいんだ。今日はこうやってくっついてるだけでも、俺…」

昂くんって、優しいんだな…。優しくて、あつたかくて、照れ屋で、可愛くて…。あのドラマの昂くんとは大違いなんだ。

「がっかりした？俺、てんでクールじゃなくって」

「ううん。もつと好きになったかも…」

「え？」

ああ。すごいこと言っちゃった。私…。

「嬉しいよ」

昂くんがまた、後ろからぎゅって抱きしめてきた。そして首にキスをしてくる。うっわ…。それだけでも、心臓がばくばくして体が熱くなる。

「え？」

昂くんが私の心の声を聞いて、ちよつと驚いてた。

「な、何？」

私また、変なこと思ってた？

昂くんがいきなり、ぐるって私のことを振り向かせた。

「ひかり、いいの？」

「な、何が？」

「だから、その…」

「な、何？」

「抱いても、いいの？俺…」

私そんなこと思っていないよ。

「思ってたよ？」

「うそだ」

「だって、首にキスをしたときに…」

「思っていないってば」

「え？でも、このまま昴くんに、抱かれてもいいかなって声、聞きたよ」

「うそだ！」

「あ。また自分で思ったこと、蓋しようとしてる？自分で感じないようにする癖あるよね？」

「え？」

「そんなこと思っちゃいけない……みたいにそう自分で思いこんで、感じたこと自分で、蓋してしまいこむよね」

「私？」

「うん。素直に思ったことそのまま、受け止めてたらいいのに」

「私が、自分で…?」

「うん」

でも、変なこと思ったら、昂くに聞こえちゃうし、嫌がられたりしないのかな。

「俺が？嫌がるわけないじゃん。どんなひかりも愛してるのに」

えええ?!!!

「ひかりだって、どんな俺のことも愛してくれてたよ?」

私が?

ううん、それはなんとなくうなづける。どんな昂くんも好きでいるかもしれない…。

「で…。いいの?」

「え?」

「だから、俺、ひかりのこと、抱いてもいいの?」

「……」

言葉につまってしまった。なんて言ったらいいんだろう。ああ、そうか。私の感じてることを素直に感じてみたらいいのか…。

しばらく私は黙ってた。そんなこと言って、昴くん、変に思わないかな…って、思っわけないって言われたばかりだ。

じゃ、えっと…。ああ。かなり恥ずかしい。昴くんのこと大好きだし、触れられただけでもこんなにときめいてるし。でもすごく嬉しいし、もっと触れて欲しいって思ってるし。

だけどいいの？10歳も年離れてるし…。ああ、年齢は関係ないって言われたっけ…。

記憶がないだけで、もう、昴くんところに泊まってるってことは、そういうこと経験してるんだよね？私。

「うん」

昴くんは、私が最後に思ったことに返事をした。

「……」

でも、なんて言ったらいいの？まさか、抱いてくださいなんて言えないし…。

「聞こえてるから、大丈夫！」

昴くんがにこって笑うと、いきなり私を押し倒してきた。

「ええ？」

「あ。もうそんなにびっくりされても、俺、強引に抱いちゃいます」

「え？」

「だって、ひかりもそれ、望んでるってわかったし」

あゝ。そうか、口にしなくても全部昴くんには、感じてることわかつちやうのか。

「そういうことだから」

昴くんはそう言うと、キスしてきた。ものすごく優しいキスで、それだけで私はとろけてしまっていた。体が宙に浮きそうになるっていうか、すごく気持ちがいい。

「ひかり、魂抜けないでね」

「え？」

魂が、抜けるって？あ、今、そんな気持ちにはなってたけど。

「幽体離脱、キスだけでひかりしちゃうから」

「幽体離脱？」

「そ。体から魂抜けるんだよね。たまに…。あ、俺もたいいてい一緒に…」

魂が、抜ける???

「ま、いいや。今はまだ抜けないでね。そのうち、魂抜けるかもしれないけど、そんなときはそんなときね」

えええ？

言ってることが理解できなかった。そ、それだけ気持ちがいいってことを言いたいのかな…。

えええええ?!

もつと私は、慌ててしまった。でも、そんなのおかまいなしに、昂くんは私が着てたパジャマをどンドン脱がせていく。

「で、電気…」

「消す？」

「うん…」

昂くんは立ち上がり電気を消した。電気を消しても、外の街灯で、部屋はうすぼんやりと明るかった。

その薄暗い中で昂くんの顔を見た。綺麗な輪郭と、優しいまなざし。

まだ、信じられない…。夢でも見てるみたいだ…。

『ひかり、愛してるよ』

時々、昂くんが心でささやく。体からその声が聞こえてきて、胸が

きゅんっとする。

いいのかな。いいんだよね…。私、昂くんの恋人なんだよね…。だから、いいんだよね？昂くと結ばれても、いいんだよね…？

心で私は自分にそう言ってた。それを昂くんは聞いてて、

『うん、いいんだよ。ひかり、俺の恋人だもん』

と答えてきた。

そして、昂くんのあつたかくて優しいぬくもりに包まれて、心からどんどん昂くんが愛しいって思いが溢れ出し、次の瞬間、ものすごい開放感を感じた。

ふわ……。体が宙に浮く。軽くて、上にのってた昂くんの体重さえ感じない。

あ。あれ？嘘。私の下に昂くんと私がいる。

『ね？魂抜けちゃったでしょ？』

昂くんの声がした。

『今、同化してる』

『私と？』

『そう…』

ほんとだ。どこから私でどこから昴くんかが、わからなくなってる。それからすごい光に包まれた。

大きな意識……。無限のそして、静寂に包まれる。地球も、宇宙も全部が一つになる。全部が私だ……。

ものすごい愛のエネルギーを感じる。こんこんと湧き出る愛のエネルギーは、耐えることなく永遠に続いている。でも、それは今ここにある。

自分の意識に戻った時、宇宙船にいた。でも、私は光の人型になっていた。隣にはもう一人、光の人型がいた。

「ひかり、ここ覚えてる？」

昴くんだ。

「……」

宇宙船から青い地球が見えた。すごく奇麗だ。

「うん。思い出した」

この宇宙船から、あの地球へ私たちは行ったんだね。ミッションを遂行するために。

「そう……。地球を愛と光の星に次元上昇させるため、俺ら、行ったんだ」

「うん…」

しばらく黙って、地球を見ていた。私と昴くんから、ものすごい光が飛び出し地球を包み込むと、地球からも光が飛び出し、私たちを包み込んだ。

「さあ。戻ろうか？」

昴くんに言われて、私たちは体に戻ってきた。

6 記憶が戻る

「あ…」

体に戻ると、窮屈さを感じた。目を開けると、昴くんが私をじっと見ていた。その目は、優しくてあったかい。いつもの昴くんだ。

「昴くん…」

私は昴くんに抱きついた。

「昴くん、愛してるよ」

愛しさでいっぱいになり、そうつぶやいた。

「思い出したの？」

「うん」

「全部？」

「うん」

「本当に？」

「本当に、全部思い出したよ」

「ひかり……!!」

昴くんが、思い切り私に抱きついてきた。

「ひかり、なんで俺のこと忘れるんだよ！ひでえよ！」

昴くんはそう言って、私の胸に顔をうずめた。

「ごめんね…。お風呂場で思い切りすべって頭打ったら、なんか忘れちゃったんだよね」

「う～～～」

昴くんは、まだ怒ってた。

「ま、いっけどさ～～。俺のこと忘れちゃってたひかりも、新鮮だったし」

「ふふ…」

「何?!」

「昴くん、思い切り照れてた」

「俺が？」

「うん」

「ふ、ふ～～んだ。照れてるふりをしてただけだよ」

なんで、そういうこと、自分で認めないのかな、まったく…。

「うつせえや」

昴くんはすねて顔をあげ、そっぽを向いてしまった。私は昴くんの顔を、私の方に引き寄せてキスをした。

「でも、記憶なくなっても、やっぱり私は昴くんに、恋してたよね？」

「……」

昴くんは黙った。でも心の中で、

『思いつきり、俺にくびったけになってたよ。俺、まじで、どうしようって思ってたもん』

と戸惑った感じで、そう言った。

「ええ？ずっと私は、昴くんにくびったけだよ？」

「え？」

「昴くんの全部が大好きだもん」

「……」

昴くんは、思い切り嬉しそうな顔をして、

「ひかり〜〜〜！」

とまた、抱きついてきた。ああ、しっぽがはえてたら、絶対にぐる

ぐる振ってるだろうな〜。

「ひかり、もう一回いい？」

「え？」

「もう一回、抱いてもいい？」

「……」

「ええ〜〜？」

昴くんはすごいがっかりした声を出した。

「あれ？私今、なんて思ってた？」

「もう、駄目って…」

「あ、それ無意識だ」

「ええ？ひで〜〜！」

「あはは。ごめん。でも、明日早いんでしょ？もう寝たほうがいいよ。夢で会おうよ、ね？」

『なんだよ〜。ひかり、俺のこと忘れてたときの方が、俺に抱かれるのも喜んでたのに』

「え？そう？」

「もう一回、記憶なくさない？」

「なくさないよ！もう、いいから早く寝なさい！明日起きれなくて知らないからね！」

『ちえ……。いきなりお姉さんぶるのかよ。ああ、どうせ俺はガキですよ〜』

昂くんが心の中で、思いきりすねてた。そしてくるりと背中を向けて、

「おやすみ！」

と言って、寝てしまった。

ああ。すごい寝つきのよさ……。すやすや寝てる昂くんの背中にキスをして、そっと抱きしめて私も眠りについた。

夢の中で、昂くんは私に抱きついてきて、

「続き、さ、続き！」

とわけのわからないことを言った。

「続き？」

「そう、もう一回。夢でならいいよね？」

しょうがないな……。もう……。心でそう思つと、昂くんは、

「やった！」

と言って、抱きついてきた。あ…。しっぽがはえてる。そしてぐるぐると振りまわってた。

ほんと、昴くんって可愛いよね…。夢でも昴くんが思い切り愛しくて、私は昴くんのことを、ぎゅって抱きしめた。

昴くん、大好きだよ…。

「俺も、ひかりのこと、愛してるよ」

そして夢の中でも、昴くんのキスに私はとろけていた。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0433k/>

2009年 昴とひかり （2012年 愛と光へ 番外編）

2011年7月11日10時56分発行